『東京大学言語学論集』**38** (2017.9) 145-161

ケチュア語アヤクーチョ方言の関係節

諸隈夕子

キーワード： ケチュア語(アヤクーチョ方言) 統語論 文法記述 関係節
接近可能性階層(Accessibility Hierarchy) 意味役割

要旨

ケチュア語アヤクーチョ方言の関係節は Comrie(1989: 151-153)でいう「空所型」の構造であり、関係節で修飾されるいわゆる主要部には主節内における格が標示されるが、関係節内における格は標示されない。従って、文中の名詞句の格や意味役割によっては、その名詞句を主要部として関係節で修飾する(以降、「関係節化する」と表現する)と、元々の意味役割が曖昧になってしまう場合がある。

Keenan & Comrie(1977: 90)の接近可能性階層についての研究では、ある名詞句がどの格にあたるかによって「関係節化のしやすさ」に違いがあることが指摘されているが、筆者の知る限りケチュア語に関してこの点からの記述は見当たらない。そこで当研究では、表 1 に示す格に関してこの観点からの記述を行い、ケチュア語の関係節に関する事実をより明らかにすることを目標とする。

表 1 アヤクーチョ方言の格(接辞)一覧

格	形態素	主な意味役割	格	形態素	主な意味役割
主格	-Ø	動作主	処格	-pi	行為の場所、時
対格	-ta	動作対象、到達点	共格	-wan	共同行為者、道具
与格	-man	動作の目標、方向	受益者格	-paq	受益者
奪格	-manta	動作の起点、材料、話題	限格	-kama	行為の限界点
属格	-pa	所有者、所属地	因格	-rayku	原因・理由

本稿では、第 1 節で扱う現象についての概要を述べ、第 2 節で調査結果を記述し、第 3 節でまとめと展望を述べる。

1.　はじめに

1.1.　テーマと目的

ケチュア語アヤクーチョ方言[1]では関係節や補文をいわゆる名詞句化された動詞によって表現するが、当方言は筆者が知る限り学習者向けの文法記述以上に詳細な記述が無く、その機能や振る舞いについて十分に記述されているとは言い難い。そこで本稿では、未記述な現象の一つとして「名詞句の関係節化の可否」を取り上げ、Keenan & Comrie(1977: 90)による関係節の接近可能性階層についての研究を参考にしながらアヤクーチョ方言の名詞の格(接辞)を元に関係節化の可否を整理した。

なお、本研究においては、当該方言のネイティヴスピーカーにコンサルタントとして例文の容認度判定や意味の解説等のご協力をいただいている。コンサルタント(40 代、女性)は 12 歳まで当該方言のモノリンガルであり、以降学校教育でスペイン語を習得、成人後に日本へ移住し日本語を習得している。

1.2.　扱う言語について

ケチュア諸語(Quechuan/Runa Simi)、通称ケチュア語は南アメリカ大陸アンデス山脈を中心とする地域で使用されている先住民言語であり、膠着的な形態を特徴とする。語順は比較的自由であるが SOV が基本とされ、基本的に句の主要部は従属部に対して後置される。また、アラインメントは常に対格型である。本研究で対象とするアヤクーチョ方言(Ayacucho/Chanka)はアヤクーチョ市を中心としたペルー南部で話されている一変種であり、ケチュア諸語の下位分類ではⅡC グループに属している。(Adelaar, 2004: 179-183)

1.3.　アヤクーチョ方言の関係節の概観

アヤクーチョ方言の関係節は、表 2 に示す接尾辞を動詞に付加することによって作られる。この時、この接尾辞が付加された動詞によって作られる節は「名詞化(nominalize)されている」とされ、主節に比べて名詞的な振る舞いを示す。また、接尾辞の種類によって関係節としての機能や意味は異なってくる。(Lefebvre, 1988 など)

表 2　アヤクーチョ方言の関係節に現れる各名詞化接辞

接辞	主な用法
-q	(従属節内の)主語を主要部とする関係節
-sqa	(従属節内の)主語以外を主要部とする関係節・既実現の内容
-na	(従属節内の)主語以外を主要部とする関係節・未実現の内容

[1] 以降、断りが無い限り当該言語を「アヤクーチョ方言」、アヤクーチョ方言をはじめとするケチュア諸語(一般に見られる傾向)を「ケチュア語(の特徴)」として言及する。

これらの接辞によって名詞化された節は、種々の接尾辞を伴って動詞の項や副詞節としても機能するが、関係節として機能するときは(1)のように名詞に前置される。

(1) Juan-pa yanu-**sqa**-n mikuna miski-m ka-chka-rqa-n.
Juan-GEN cook-**NMLZ.REAL**-3SG food delicious-AF be-PROG-PAST-3SG
「フアンが作った料理はおいしかった」
(Zariquiey & Córdova, 2008 : 160)

表 2 に示した接辞のうち-sqa または-na によって名詞化された動詞は主節(「動詞パラダイム」を用いる)と異なり、その主語の人称と数を名詞の所有者の人称・数を示す接尾辞(以降、「名詞パラダイム」)によって標示する。派生形容詞や派生名詞として語彙化していない限り、この屈折は義務的である。一方、-q を用いた関係節では動詞パラダイム・名詞パラダイムのいずれの(主語)人称接尾辞も現れることができない。

表 3 アヤクーチョ方言における動詞の人称変化

	動詞パラダイム	名詞パラダイム
1SG	-ni	-y
2SG	-nki	-yki
3SG	-n	-n
1PL.EXCL	-niku	-yku
1PL.INCL	-nchik	-nchik
2PL	-nkichik	-ykichik
3PL	-nku	-nku

また、主節・従属節のどちらにおいても主語・目的語は省略可能であるが、主節において主語、(直接)目的語が明示される場合、(2)のようにそれぞれ必ず NOM('-Ø')、ACC('-ta')で格標示され、他の標示が使われることは無い。

(2) a. Ñuqa-Ø tanta-ta miku-ru-ni.
I-NOM bread-ACC eat-PAST-1SG
「私はパンを食べた」

b. *Ñuqa-Ø tanta-Ø miku-ru-ni.
I-NOM bread-NOM eat-PAST-1SG

一方-sqa、-na を用いた関係節内では、主節と同様の標示の他、主語を GEN('-pa')、目的語を NOM('-Ø')と同形の格で標示する、いわゆる示差的主語/目的語標示(Differential Subject Marking/ Differntial Object Marking)が起きる場合がある。特に主語と目的語の標示が同じく-Ø になる際の混乱を避けるため、本稿においては目的語に対する-Ø を zero-objective(ZO)とグロスを振ることとする(表 4)。なお、主語と目的語以外の格については主節と名詞化節内で共通の標示がなされるため、グロスも共通のものを用いる。

表 4　本稿における主語・目的語の格標示に対するグロス

	主節内		名詞化節内	
	標示	グロス	標示	グロス
主語	-Ø	NOM (nominative)	-Ø	NOM (nominative)
			-pa	GEN (genitive)
(直接)目的語	-ta	ACC (accusative)	-ta	ACC (accusative)
			-Ø	**ZO (zero-objective)**

2.　名詞句の格と関係節化の可否について

Keenan & Comrie(1977: 90)は、ある名詞句の関係節化が可能かどうかをその名詞句の格を元に分類し、通言語的にどの格がより関係節化されやすいかという「接近可能性階層(Accessibility Hierachy)」を提示した。本稿ではこの方針に則り、アヤクーチョ方言における関係節化の可否を名詞句の格ごとに調査した。

アヤクーチョ方言の主節における名詞句の格は、無標である主格を除いて明示的な格接尾辞によって示される。何を格接尾辞とするかは研究者によって多少増減するが(特に最下部の 2 つ)、基本的に挙げられるものを列挙すると表 5 の通りになる。

表 5(再掲)　アヤクーチョ方言の格(接辞)一覧

格	形態素	主な意味役割	格	形態素	主な意味役割
主格	-Ø	動作主	処格	-pi	行為の場所、時
対格	-ta	動作対象、到達点	共格	-wan	共同行為者、道具
与格	-man	動作の目標、方向	受益者格	-paq	受益者
奪格	-manta	動作の起点、材料、話題	限格	-kama	行為の限界点
属格	-pa	所有者、所属地	因格	-rayku	原因・理由

これらの格接辞はおおよそ文中の意味役割と一対一で対応しているが、通言語的に見られるように、-wan(共同行為者または道具)のように形態的に同じ格接辞でも状況に応じて異なる意味役割を果たすものがある。後述の通り、格標示が同じでも意味役割が異なると関係

節化の可否をはじめとして振る舞いが異なる場合があるため、以下では必要に応じて、それぞれの格接辞が表しうる意味役割ごとに記述する。

2.1. 関係節化が容易なもの

これらの格のうち、どの意味役割でも関係節化が可能なのは主格、対格、処格の 3 つであった。以下に詳細な結果を示す。

2.1.1. 主格

主格は節中の主語を表す。表 2 に見る通り、主格の関係節化では他の格と異なり名詞化接辞は-q を用いる(3)。逆に、この-q を他の格の関係節化で用いることはできないし、主格の関係節化で-sqa や-na を用いることもできない(3)。(ただしこの点について、2.3.3 で述べるように例外と考えることができる事象も存在する。)

(3) a. tanta-ta miku-**q** runa
bread-ACC eat-**NMLZ.AG** man
「パンを食べる人」

b. *tanta-ta miku-**sqa**-n runa
bread-ACC eat-**NMLZ.REAL**-3SG man
「パンを食べた人」

c. *tanta-ta miku-**na**-n runa
bread-ACC eat-**NMLZ.IR**-3SG man
「パンをこれから食べる人」

2.1.2. 対格

ケチュア語の対格は動作の動作の対象の他に移動動詞の到達点や目的地も表す。(4)は動作対象の例、(5)は到達点の例である。

(4) a. Juan-pa　ranti-sqa-n　cavallo
Juan-GEN　buy-NMLZ.REAL-3SG　horse
「フアンが買った馬」

b. Juan-Ø　cavallo-**ta**-m　ranti-ru-n.
Juan-NOM　horse-**ACC**-AF　buy-PAST-3SG
「フアンは馬を買った」

(5) a. Jose-pa　chaya-sqa-n　llaqta
Jose-GEN　arrive-NMLZ.REAL-3SG　village
「ホセが着いた町」

b. Jose-Ø　chay　llaqta-**ta**-m　chaya-ru-n.
Jose-NOM　that　village-**ACC**-AF　arrive-PAST-3SG
「ホセはその町に着いた」

2.1.3. 処格

処格は空間的な場所(6)だけでなく、時間軸上の位置(7)を示すこともできる[2]。

(6) a. ñuqa-pa　llamka-sqa-y　tienda
I-GEN　work-NMLZ.REAL-1SG　store
「私が働いている(働いていた)店」

b. Ñuqa-Ø chay　tienda-**pi**-m　llamka-ni.
I-NOM　that　store-**LOC**-AF　work-1SG
「私はその店で働いている」

---

[2] なお、時格的な用法の関係節(「～する時に…」)は、-spa(主節と主語が同じである場合)や-pti または-qti(主節と主語が異なる場合)という別の接辞を用いて副詞的に表すこともできる。

a. Jorge-pa　wañu-sqa-n　pacha-manta...
Jorge-GEN　die-NMLZ.REAL-3SG　time-ABL
「ホルヘが死んだ時から……」

b. Jorge-Ø　wañu-pti-n...
Jorge-NOM　die-DS-3SG
「ホルヘが死んでから……」

(7) a. qam-pa waqa-sqa-yki tuta
you-GEN cry-NMLZ.REAL-2SG night
「あなたが泣い(てい)た夜」

b. Qam-Ø chay tuta-**pi** waqa-ru-n.
you-NOM that night-**LOC** cry-PAST-3SG
「あなたはその夜泣いた」

2.2. 関係節化が困難なもの

限格、受益者格、因格の3つは関係節化が不可能であった。これらは一般に、「関係節化すると文法的には適文となるが、意図した意味にならない」とまとめられる。

2.2.1. 限格

限格の要素を関係節化(しようと)した文は、対格や処(時)格の関係節化として解釈される。

(8) a. ñuqa-pa punchu-Ø ruwa-sqa-y punchaw
I-GEN poncho-ZO make-NMLZ.REAL-1SG day
「私がポンチョを作った日」
*[3]「私がその日までにポンチョを作ったところの日」

b. Ñuqa-Ø (chay) punchaw-**kama** punchu-ta-m ruwa-ru-ni.
I-NON that day-**LIM** poncho-ACC-AF make-PAST-1SG
「私はその日までにポンチョを作った」

(9) a. Ana-pa ri-sqa-n mayu
Ana-GEN go-NMLZ.REAL-3SG river
「アナが行った川(それより先に行った可能性もある)」
*「アナがそこまで行ったところの川」

b. Ana-Ø mayu-**kama** ri-ru-n.
Ana-NOM river-**LIM** go-PAST-3SG
「アナは川まで行った」

---

3 以降、訳文前に*を付ける場合は、「問題となっている例文をその訳文の意味には解釈できない」ということを表すものとする。

2.2.2. 受益者格・因格

受益者格(10)を関係節化しようとした文は受益者格としての解釈も不可能ではないが、「私がその人を原料にポンチョを作った人」と材料のように解釈されて不自然に聞こえるとのことだった。因格(11)を関係節化しようとした文は、主に対格の関係節化として解釈される。

(10) a. ?ñuqa-pa　punchu-Ø　ruwa-sqa-y　runa
I-GEN　poncho-ZO　make-NMLZ.REAL-1SG　man
「私がその人のためにポンチョを作ったところの人」

b. Ñuqa-Ø　chay　runa-**paq**　punchu-ta-m　ruwa-ru-ni.
I-NOM　that　man-**BEN**　poncho-ACC-AF　make-PAST-1SG
「私はその人のためにポンチョを作った」

(11) a. yanu-sqa-y　wawa
cook-NMLZ.REAL-1SG　child
「私が料理した子供」
*「私がその子$_i$のために料理したところの子供$_i$」

b. Wawa-**rayku**-m　yanu-ru-ni.
child-**CSL**-AF　cook-PAST-1SG
「私は(その)子供のために料理した」

2.3. 意味によって可否が変わるもの

属格、与格、共格、奪格については、意味によって関係節化の許容度が変わる。また、属格と共格については、文法的に他の格の関係節化とは異なる振る舞いを見せることが確認された。

2.3.1. 属格

属格は、所有者(12)の意味で使うか所属地(13)の意味で使うかによって関係節化の可否が分かれた(前者は可、後者は不可)。また、所有者の意味で関係節化した場合でも、他の格の関係節化では主格に並んで許容される[4]主語に対する属格標示が不可能であることがわかった。今回調査したのは所有者と所属地の２つの意味のみだが、属格の意味は「部分に対する全体」など更に細分化できるため、今後の調査で調べたい。

[4] 1.3 を参照のこと。

(12) a. ñuqa-Ø ñaña-n-wan casaraku-sqa-y warmi
I-NOM sister-3SG-COM marry-NMLZ.REAL-1SG woman
「私がその妹(姉)と結婚したところの女」

b. ? ñuqa-pa ñaña-n-wan casaraku-sqa-y warmi
I-GEN sister-3SG-COM marry-NMLZ.REAL-1SG woman

c. Ñuqa-Ø chay warmi-**pa** ñaña-n-wan casaraku-ru-ni.
I-NOM that woman-**GEN** sister-3SG-COM marry-PAST-1SG
「私はその女の妹(姉)と結婚した」

上記の通り、所有者の意味での関係節化は可能である。ただしこの場合主語の格標示に制限があり、(12)のように主語を主格で標示する場合は適格であるが、(12)のように主語標示を属格で行うと「所有者と所有人称代名詞の人称が矛盾している」とされ、文法的に解釈が不可能という程ではないが不自然になるとの回答を得た。

一方、(13)のように所属地の意味での関係節化は主語の格標示によらず不可能である。

(13) a. *ñuqa-pa biblioteca-n-pi libro-Ø maska-sqa-y
I-GEN library-3SG-LOC book-ZO search-NMLZ.REAL-1SG

yachaywasi
university
(私がその図書館で本を探したところの大学)

b. Ñuqa-Ø yachaywasi-**pa** biblioteca-n-pi libro-ta
I-NOM university-**GEN** library-3SG-LOC book-ACC

maska-ru-ni.
search-PAST-1SG
「私は大学の図書館で本を探した」

2.3.2. 与格

与格は動作の目標(14)の他、移動動詞における移動の方向(15)も表す。後者の意味は対格と類似しているが、対格で表されるよりも漠然とした「…の方へ」という意味になる。

(14) a. Juan-pa　anillo　qu-sqa-n　warmi
Juan-GEN　ring　give-NMLZ.REAL-3SG　woman
「フアンが指輪をあげた女」

b. Juan-Ø　Maria-**man**　anillo-ta-m　qu-ru-ni.
Juan-NOM　woman-**DAT**　ring-ACC-AF　give-PAST-1SG
「フアンはマリアに指輪をあげた」

(15) a. chay　ñan-pa　ri-sqa-n　llaqta
that　road-GEN　go-NMLZ.REAL-3SG　village
「その道が続く村」

b. Chay　ñan-Ø　chay　llaqta-**man**　ri-n.
that　road-NOM　that　village-**DAT**　go-3SG
「その道はその村へ続く」

ただし(16)のような例は、文法的には適格であるものの対格の読みが支配的であり、与格の関係節化としての解釈は不可能であった。

(16) a. Ana-pa　ri-sqa-n　mayu
Ana-GEN　go-NMLZ.REAL-3SG　river
「アナが行った川」
*「アナがその方面に行った川」

b. Ana-Ø　chay　mayu-**man**　ri-ru-n.
Ana-NOM　that　river-**DAT**　go-PAST-3SG
「アナはその川の方に行った」

2.3.3. 共格

-wan は主に人間に対して用いると「～と(共に)」という共格的な意味になるが、非生物や人間以外の動物に対して、または使役文の中で用いると「～で」「～によって」のような道具格的な意味が優勢になる。道具格的用法のものも共格的用法のものも、共に関係節化が不自然または不可能な場合があるが、後者の方がより許容度が下がる。

(17) a. ?ñuqa-Ø/ñuqa-pa　tusu-sqa-y　warmi
I-NOM/I-GEN　dance-NMLZ.REAL-1SG　woman
「私が共に踊った女」

b. Ñuqa-Ø chay　warmi-**wan**　tusu-ru-ni.
I-NOM　that　woman-**COM/INST**　dance-PAST-1SG
「私はその女と踊った」

(17)は「私が共に踊った女」と解釈できないほどではないが、主語の格標示が属格であれ主格であれ「私の女」もしくは「私が(その上で)踊った女」といった意味が強くなってしまい、非常に不自然であるという回答を得た。その代わり、(18)のように「元々の主語-wan 動詞-NMLZ-主要部の人称接尾辞」、または(19)のように主要部を主語とみなして-q で名詞化する表現が自然な表現となる。

このように元々の主語を共格(道具格)接辞で標示する場合、名詞化を受けた動詞に対する人称マーキングは関係節の主語(ここでは一人称単数)ではなく主要部に一致するものとなる。このような一致は他の格の関係節化では許容されない。逆に(18)のように、他の格の関係節化と同じく人称マーキングを関係節の主語に一致させた場合、「冗長」とされて不適格、あるいは不自然な表現となる。

(18) a. ñuqa-**wan**　tusu-sqa-**n**　warmi
I-**COM/INST**　dance-NMLZ.REAL-**3SG**　woman
「私と踊った女」

b. *ñuqa-wan　tusu-sqa-y　warmi
I-COM/INST　dance-NMLZ.REAL-1SG　woman

(19) ñuqa-wan　tusu-q　warmi
I-COM/INST　dance-NMLZ.AG　woman
「私と踊る/踊った女」

なお、他の格の関係節化では主語に対する属格標示と目的語に対する対格標示が共起しえないが、(20)のようにこのタイプの主語標示は目的語の対格標示と共起可能である。

(20) a. ñuqa-wan　pirqa-Ø/pirqa-ta　llumpi-sqa-n　runa
I-COM/INST　wall-ZO/wall-ACC　paint-NMLZ.REAL-3SG　man

「私と壁を塗った人」

b. Ñuqa-Ø chay runa-**wan** pirqa-ta llumpi-ru-ni.
I-NOM that man-**COM/INST** wall-ACC paint-PAST-1SG
「私はその人と壁を塗った」

道具格的用法の共格も関係節化は可能であるが、(22)のように文脈によっては対格の関係節化という解釈の方が優勢となる。

(21) a. ñuqa-(pa) Kawamata-ta ri-sqa-y tren
I-NOM(GEN) 川俣(地名)-ACC go-NMLZ.REAL-1SG train
「私が川俣に行った(時に乗った)電車」

b. Ñuqa-Ø tren-**wan** Kawamata-ta-m ri-ru-ni.
I-NOM train-**INST/COM** 川俣-ACC-AF go-PAST-1SG
「私は電車で川俣に行った」

(22) a. ñuqa-Ø/ñuqa-pa qillqa-sqa-y qillqana
I-NOM/I-GEN write-NMLZ.REAL-1SG pen
「私が(絵として)描いたペン」
?「私が書くのに使ったペン」

b. ñuqa-wan qillqa-sqa-n qillqana
I-COM/INST write-NMLZ.REAL-3SG pen
「彼/彼女が私と(絵として)描いたペン」
または「彼/彼女が私と書くのに使ったペン」
*「私が書くのに使ったペン」

c. Ñuqa-Ø chay qillqana-**wan** qillqa-ru-ni.
I-NOM that pen-**INST/COM** write-PAST-1SG
「私はそのペンで書いた」

ただし道具格的用法は共格的用法とは異なり、(22)のように主語を共格で標示することはできない。これは、随伴者はある出来事に関して主語と対等な動作主であるとみなされ得るが、主語と道具は対等な「動作主」とはみなされ得ないからであると考えられる。

この「主語と随伴者の対等性」を考えると、(18)は「共格」の関係節化ではなく主格の関係節化、つまり warmi「女」を(元の主節内でも)主格、ñuqa「私」を(元の主節内でも)共格とみなした関係節化ではないかという疑念も生じる(実際、(19)の例はそのように説明できる)。しかしそのように解釈した場合、2.1.1 で述べたように「主格の関係節化では-sqa(-na)を用いることができない」という点で齟齬が生じる。今回の調査結果ではこの現象が「共格を関係節化した場合に主語の格標示と動詞の人称標示が他の格の関係節化と異なる」と説明できるのか「共格(随伴者)を伴う場合にのみ主格を-sqa や-na を用いて関係節化できる」と説明できるのか判断するのに十分な情報は得られなかったため、どちらの説明が適切かという点については保留としたい。

2.3.4. 奪格

奪格は起点や分離の元(「～から」)の他、「～について」のような話の主題、材料という意味も示すことができる。起点や主題としては関係節化が不可能だったが、材料の意味としては関係節化が可能だった。

(23) a. ñuqa-pa ri-pu-sqa-y llaqta
I-GEN go-TRL-NMLZ.REAL-1SG village
「私がそこへと(対格)発った村」
*「私がそこから出た村」

b. Ñuqa-Ø llaqta-**manta** ri-pu-ru-ni.
I-NOM village-**ABL** go-TRL-PAST-1SG
「私はその村から発った」

(23)は文法的には適格であるが、(23)の関係節化とはみなされない。その代わり、(15)で見た通り(24)の関係節化として解釈される。

(24) Ñuqa-Ø llaqta-**ta** ri-pu-ru-ni.
I-NOM village-**ACC** go-TRL-PAST-1SG
「私はその村に発った」

(25)「～について話す」も(23)と同じく、文法的には適格だが(25)が関係節化されたものとしては解釈できず、(26)を関係節化したものと解釈される。

(25) a. ñuqa-pa willa-sqa-y runa

I-GEN　　talk-NMLZ.REAL-1SG　man
「私がその人に(与格)話したところの人」
*「私がその人について話したところの人」

b. Ñuqa-Ø　　runa-**manta**　　willa-ru-ni.
I-NOM　　man-**ABL**　　talk-PAST-1SG
「私はその人について話した」

(26) Ñuqa-Ø　　runa-**man**　　willa-ru-ni.
I-NOM　　man-**DAT**　　talk-PAST-1SG
「私はその人に話した」

一方で、(27)「～を材料として」という意味では関係節化が可能であった。

(27) a. wawa-pa　　iqiqu-Ø　ruwa-sqa-n　　mitu
child-GEN　　doll-ZO　make-NMLZ.REAL-3SG　mud
「子供が(その泥から)人形を作ったところの泥」

b. Wawa-Ø　　mitu-**manta**　　iqiqu-ta　　ruwa-ru-n.
child-NOM　　mud-**ABL**　　doll-ACC　　make-PAST-3SG
「子供が泥から人形を作った」

3.　まとめと展望

以上の例をまとめると、アヤクーチョ方言における各格の関係節化の可否は(28)のように分かれる。

(28)

可能なもの	主格、対格、処格
状況によって可否が分かれるもの	属格、与格、共格、奪格
不可能なもの	限格、受益者格、因格

さらにこれを意味役割の観点から分けると、今回調査した限りでは(29)のように分類できる。共同行為者(comitative)に関しては他の意味役割と振る舞いが異なるが、関係節化そのものは可能であることから「可能なもの」と分類した。

(29)

可能なもの	動作主(主格)、動作対象(対格)、動作の目標(与格)、 行為の場所・時(処格)、移動の到達点(対格)、所有者(属格)、道具(共格)、 材料(奪格)、共同行為者(共格)
不可能なもの	所属地(属格)、移動の方向(与格)、行為の始点(奪格)、話題(奪格)、 行為の限界点(限格)、受益者(受益者格)、原因・理由(因格)

Keenan & Comrie(1977: 90)で提示された(通言語的な)接近可能性階層は(30)の通りである。

(30)　主語＞直接目的語＞間接目的語＞斜格＞属格＞比較の対象

(28)および(29)と(30)を比較すると、「主語＝主格>直接目的語=対格>間接目的語=与格の一部」という点では合致しており、アヤクーチョ方言の接近可能性階層は概ね通言語的な傾向に沿うものであると言える。ただしアヤクーチョ方言を始めとするケチュア語は「斜格」の下位分類が豊富であり、(30)の分類に正確に従うものではない。また、比較の対象については調査していなかった他、「サンマが焼ける匂い」のようないわゆる「外の関係」の関係節がアヤクーチョ方言において可能であるか、またどのような場合に可能であるかなど、当言語の関係節の全容を理解するためには、格のみにとどまらない観点からの調査が必要である。

4.　略号一覧

1	first person
2	second person
3	third person
ABL	ablative
ACC	accusative
AF	affirmative
AG	agentive
BEN	benefactive
COM	comitative
CSL	causal case
DAT	dative
DS	different subject
EXCL	exclusive
GEN	genitive
INCL	inclusive
INST	instrumental
IR	irrealis
LIM	limitative
LOC	locative
NMLZ	nominalizer/nominalization
NOM	nominative
PAST	past
PL	plural
PROG	progressive
REAL	realis
SG	singular
TRL	translocative
ZO	zero objective

参考文献

Adelaar, Willem F. H. & Muysken, Pieter C. (2004). *The languages of the Andes*. Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, B. (1989). *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology.* Oxford/Blackwell: University of Chicago Press.

Keenan, E. L. & Comrie, B. (1977). Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8(1), 63–99.

Lefebvre, C. & Muysken, Pieter C. (1988). *Mixed categories: Nominalizations in Quechua.* Dordrecht, Holland/Boston: Kluwer Academic Publishers.

Zariquiey, R. & Córdova, G. (2008). *Qayna, kunan, paqarin: Una introducción práctica al quechua chanca.* Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.

'Accessibility Hierarchy' of Relative Clauses in Ayacucho Quechua

Yuko Morokuma

Keywords: Ayacucho Quechua, Syntax, Descriptive Grammar, Relative Clause, Accesibility Hierarchy, Semantic Role

Abstract

This article deals with Accessibility Hierarchy, which is proposed by Keenan & Comrie(1977), of Ayacucho Quechua, a relatively poorly researched language among Quechuan languages. Examining what kind of noun phrases can be relativised in terms of their case form, the following observations are obtained: (i) nominative, accusative and locative can be relativised with high acceptability, while limitative, benefactive and causative are not accepted. (ii) acceptability of relativisation of other cases, namely genitive, dative, comitative and ablative varies depending on their semantic roles or grammatical conditions.

(もろくま・ゆうこ)